

その他

障害者スポーツに関する言葉の認知度および意識に関する研究  
－ 2014年～2020年度の意識の推移に注目して－

A Study on the recognition of the words referring to para-sports and consciousness  
to people with disabilities and para-sports  
－ Focus on changes from 2014 through 2020 －

藤田 紀昭 安藤 佳代子 兒玉 友

Motoaki FUJITA, Kayoko ANDO, Yu KODAMA

日本福祉大学 スポーツ科学部

Faculty of Sport Sciences, Nihon Fukushi University

## 1. はじめに

障害者スポーツに関わる言葉の認知度および、障害者や障害者スポーツに対する意識に関してはこれまで2014年度、2016年度、2018年度と定期的に調査を実施し、報告を行ってきた<sup>1</sup>。これらはパラリンピック国内開催によって障害者スポーツの認知度や人々の意識がどう変化するかを明らかにするためのものである。2018年度の調査の後、同様の調査を2019年および2020年度に実施した。本来ならば2020年度に行う調査は2020東京パラリンピック開催の後に実施し、開催前の結果と比較検討し大会の影響を明らかにする予定であった。しかしながら、新型コロナウイルス感染拡大のためパラリンピックは2021年に延期となった。そのため2020年度の調査は大会開催後の調査との比較検討を行うための基礎資料を得ることを目的として実施した。そこで今回は、障害者スポーツ関連の言葉の認知度、障害者に対する意識および障害者スポーツに対する意識の変化を5回の調査結果をもとに報告する。

## 2. 目的

2013年9月にパラリンピック国内開催が決定して以降、障害者スポーツに関わる言葉の認知度、人々の障害者に対する意識、および障害者スポーツに対する意識の変化を明らかにすることを目的とする。

本研究は日本福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認（2018年9月6日申請番号18-11）を受けて実施した。

## 3. 方法

調査はインターネットを利用して実施した。調査業務は株式会社マクロミル（本社、東京都港区）に委託した。質問内容および回答方法を筆者が指定し、ホームページ上のアンケート画面の作成、調査依頼、結果の収集を委託会社が行った。収集されたデータを受け取り、集計および統計分析をIBM SPSS Statistics<sup>23</sup>によって行った。本報告が対象とする5回の調査の概要については表1に示すとおりである。調査対象者は12歳以上の男女、回答者は2066人、性別と年齢ごとに我が国の人口比率になるよう上限数を決めて回答を受け付けた。

表1 調査の概要

	調査実施時期	サンプル数	平均年齢	S D	男性	女性	調査委託業者
2014年度調査	2014年12月	2,066	47.3	17.2	49.4%	50.6%	(株) マクロミル
2016年度調査	2016年12月	2,066	47.5	17.4	49.4%	50.6%	(株) マクロミル
2018年度調査	2018年12月	2,066	47.2	17.2	49.4%	50.6%	(株) マクロミル
2019年度調査	2019年12月	2,066	47.3	17.1	49.4%	50.6%	(株) マクロミル
2020年度調査	2021年1月	2,066	47.2	17.1	49.4%	50.6%	(株) マクロミル

本報告で対象とする調査項目は属性に関する項目として性別、年齢の2項目である。障害者スポーツ認知度に関する項目として「オリンピック」「パラリンピック」「デフリンピック」「スペシャルオリンピックス」(以上国際大会名)、「車いすテニス」「車いすバスケットボール」「ボッチャ」「ゴールボール」「パラバドミントン」(以上競技名)、「クラシファイヤー」「ガイドランナー」「オリンピック・パラリンピックのレガシー」「パラリンピック教育」「共生社会」「合理的配慮」(以上障害者スポーツに関連する言葉)の計15の言葉について尋ねた。これらについて「知っている」「聞いたことがある」「知らない」の3つから選択してもらった。なお「オリンピック・パラリンピックのレガシー」「パラリンピック教育」「共生社会」「合理的配慮」の4つの言葉は2018年度の調査以降に加えたものである。本報告ではそれぞれの言葉について知っていると答えた人の割合の変化を見ていく。

障害者に対する意識に関しては、「障害のある人はかわいそうな人だ」「障害のある人は障害のない人と同じような生活は難しい」「障害のある人の中には特殊な能力を持った人がいる」「障害のある人を理解することは難しい」「障害のある人の身体能力は障害のない人より劣っている」の5項目について「全くそのとおりに思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらとも言い難い」「どちらかといえばそうは思わない」「全くそうは思わない」の5つから一つを選んでもらった。

障害者スポーツに対する意識に関する質問項目は「障害のある人がスポーツを楽しむことは難しい」「障害者スポーツは特別なスポーツである」「障害者スポーツは見るスポーツとしては面白くない」「障

害のない人のスポーツと比べて障害者スポーツではそれほど技術は必要ない」「パラリンピックはオリンピックと比べるとレベルが低い」の5項目について「全くそのとおりに思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらとも言い難い」「どちらかといえばそうは思わない」「全くそうは思わない」の5つから1つを選んでもらった。

障害者および障害者スポーツに対する意識に関する質問は否定的表現となっていることから<sup>2</sup>、「全くそうは思わない」に5点、逆の「全くそのとおりに」に1点を与え、点数が高いほどそれぞれに対して肯定的意識を持っていることになる。本報告では障害者に対する意識に関する5項目および、障害者スポーツに対する意識5項目の平均得点、障害者スポーツに対する意識と障害者に対する意識を合わせた10項目の平均得点の推移を見ていく。

#### 4. 結果

##### 1) 障害者スポーツに関する言葉の認知度の推移

図1は大会の認知度の推移について示している。「オリンピック」「パラリンピック」とも95%以上の高いレベルで推移しており、大きな変化は見られない。

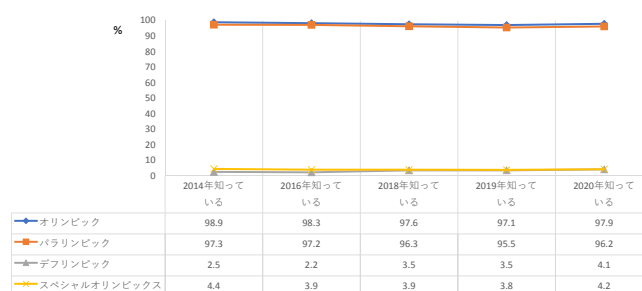


図1 大会の認知度の推移 (単位: %)

逆に、デフリンピックとスペシャルオリンピックスは2～4%程度で非常に低いレベルで推移しており、大きな変化は見られない。「パラリンピック」は2014年調査前から広く認知されている。一方、「デフリンピック」と「スペシャルオリンピックス」はパラリンピックの国内開催の影響は及んでおらず、認知度は2%～4%前後と低いままである。

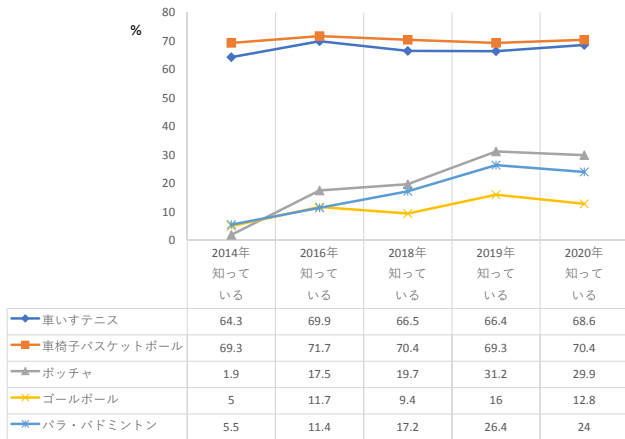


図2 競技の認知度の推移 (単位: %)

図2は障害者スポーツ競技の認知度の推移を示している。車いすバスケットボールの認知度が高く70%前後で推移している。車いすテニスはこれに次いで高く60%代後半で推移している。この2つについては5回の調査においてほぼ横ばいと言える。

これに対し、ボッチャ、ゴールボール、パラバドミントンは2014調査ではそれぞれ1.9%、5.0%、5.5%だったものが2020年度調査では29.9%、12.8%、24.0%と認知度が上がっていた。

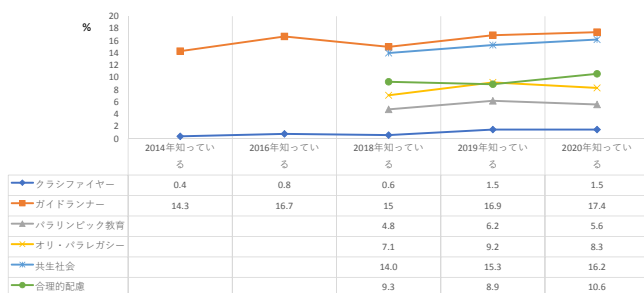


図3 障害者スポーツに関する言葉の認知度の推移 (単位: %)

図3は障害者スポーツに関する言葉の認知度の推移を示している。「ガイドランナー」は16%前後、「共生社会」は15%前後、「オリンピック・パラリンピックのレガシー」は8%前後、「パラリンピック教育」は5%前後、「合理的配慮」は9%前後、「クラシファイヤー」は1%前後で推移している。「オリンピック・パラリンピックのレガシー」以外の5つの言葉は2018年度調査以降やや認知度が上がっている。

2) 障害者に対する意識, 障害者スポーツに対する意識の変化

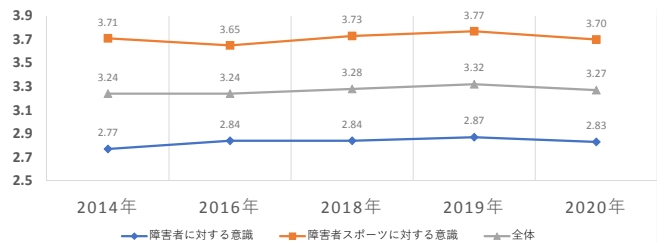


図4 障害者、障害者スポーツに対する意識の変化 (2014 - 2020年)

表2 意識の平均の差が見られた年 \*\*p<.01 \*P<.05

障害者に対する意識	2014 < 2016	**
	2014 < 2018	**
	2014 < 2019	**
	2014 < 2020	*
障害者スポーツに対する意識	2014 < 2019	**
	2016 < 2018	**
	2016 < 2019	**
意識全体	2019 > 2020	**
	2014 < 2019	**
	2016 < 2019	**

図4は障害者に対する意識に関する質問5項目の平均の推移, 障害者スポーツに対する意識に関する質問5項目の平均の推移, およびこれらを合わせた10項目の平均の推移を示している。表2はそれぞれ平均の差が見られた年を示している。

障害者に対する意識に関しては2014年の平均と

それ以外の4回の調査結果との間に差が見られた。2020年に若干低下しているが、2019年まではわずかずつではあるが増加していた。

障害者スポーツに関する意識の平均は2014年と2019年、2016年と2018年、2016年と2019年の間で差が見られそれぞれ増加傾向にあったが、2020年には低下していた。

全体平均では2014年と2016年、2016年と2019年の間で増加傾向が認められた。

## 5. まとめ

2014年度、2016年度、2018年度、2019年度、2020年度に実施した障害者スポーツに関わる言葉の認知度、障害者に対する意識、および障害者スポーツに対する意識の変化についてみてきた。

言葉の認知度ではボッチャ、ゴールボール、パラバドミントンの三つの言葉の認知度が大きく伸びていたが、他の言葉に関しては若干伸びているかもしくは横ばいであった。

障害者、および障害者スポーツに対する意識は2014年度から2019年度にかけて人々の意識がやや肯定的になる傾向が見られたが、2020年度は若干低下していた。

2021年にパラリンピック東京大会が実施された後、認知度や人々の意識がどのように変化するのかを調査する予定である。

本研究は科学研究費18K10907「パラリンピックの無形のレガシーに関する研究」に対する助成を受けて実施したものである。

## 注

- 1 これまで行った報告は以下の通りである。藤田紀昭(2016)障害者スポーツ、パラリンピックおよび障害者に対する意識に関する研究。同志社大学スポーツ健康科学, 8: 1-13., 藤田紀昭(2018)障害者スポーツ、パラリンピックおよび障害者に対する意識に関する研究 第2報 ~ 2014年と2016年の比較を中心として

~。日本福祉大学スポーツ科学論集, 1: 22-33., 藤田紀昭(2019)パラリンピックに対する人々の意識に関する調査研究, 日本福祉大学スポーツ科学論集, 2: 9-16., 藤田紀昭・兒玉友・安藤佳代子(2020)障害者スポーツに関する経験の違いと障害者スポーツに対する意識に関する研究, 研究紀要(障がい者体育・スポーツ研究会), 43: 21-24., 藤田紀昭・安藤佳代子・兒玉友(2020)障害者スポーツに関する言葉の認知度に関する研究。日本福祉大学スポーツ科学論集, 3: 11-20., 藤田紀昭・兒玉友・安藤佳代子・三井利仁(2021)障害者スポーツの経験の違いと障害者に対する意識に関する研究。日本障がい者スポーツ学会誌, 29: 51-55.

- 2 質問の表現を肯定的表現とした場合、回答者が安易に「全くその通りだと思う」と回答する可能性があることから、否定的表現とした。

## 文献

- 藤田紀昭(2016)障害者スポーツ、パラリンピックおよび障害者に対する意識に関する研究。同志社大学スポーツ健康科学, 8: 1-13.
- 藤田紀昭(2018)障害者スポーツ、パラリンピックおよび障害者に対する意識に関する研究 第2報 ~ 2014年と2016年の比較を中心として~。日本福祉大学スポーツ科学論集, 1: 22-33.
- 藤田紀昭(2019)パラリンピックに対する人々の意識に関する調査研究, 日本福祉大学スポーツ科学論集, 2: 9-16.
- 藤田紀昭・兒玉友・安藤佳代子(2020)障害者スポーツに関する経験の違いと障害者スポーツに対する意識に関する研究, 研究紀要(障がい者体育・スポーツ研究会), 43: 21-24.
- 藤田紀昭・安藤佳代子・兒玉友(2020)障害者スポーツに関する言葉の認知度に関する研究。日本福祉大学スポーツ科学論集, 3: 11-20.
- 藤田紀昭・兒玉友・安藤佳代子・三井利仁(2021)障害者スポーツの経験の違いと障害者に対する意識に関する研究。日本障がい者スポーツ学会誌, 29: 51-55.